

日 仏 の 映 画 に つ い て

セ ゴ ン ヴ ァ レ リ ー

幼い頃から、映画の魅力を感じて、映画館で時間を過ごす快樂にふけた。4年前にパリで日本映画と出会い、それから毎日日本映画に注目してきた。昨年の10月からは日本に住む機会が与えられ、一年間、日本映画を集中して研究することができた。この研究をまとめると、はじめに、映画が如何に進歩し、今日に至ったかを考察する。その上で、日本とフランスの映画の歴史的な発展、製作機構、現在の状態を考えたい。これは、私がフランス人として日仏の映画の関係に深く興味を持っているために選んだ題材である。

はじめに、映画は如何に誕生したか

映画は南フランスの陽光の中から生まれた。19世紀末(1895)にはリュミエール兄弟によつて世界初のフィルムが南仏の光で撮影されたのである。そのくシネマトグラフとして発表された「列車の到着」などの短編は、南仏のラ・シオタという場所で撮られている。リュミエールの工場主だったリュミエール家の別荘がこの地にあったからだ。最初のシネマトとして、撮影された歴史的フィルムが、実はリュミエール家の家族映画であった。その映画は、パリのグラン・カフェで初めて公開された。サイレント映画の出発点であった。その発明されたシネマトグラフは一、二年後の1897年頃には日本に輸入され、「活動写真」の名で公開された。日本の最初の映画

(2)

「祇園芸妓の踊り」という作品は、パイタス
コープでも、大阪で、手踊り、とい、作、品、は、パ、イ、タ、ス
の形をして、最も初め、手映、さ、れ、た。、諸、外、国、の、短、編、劇、映、画、と
し、詞、を、話、る、弁、士、が、い、た。、に、ス、ク、リ、ー、の、横、手、に

映 画 の 製 作 機 構

フランスでは、パテおよび、ゴームンとい
う最初の映画会社、が1902年に設立された。数年
後、日本の最初の映画スタジオが東京に設立
された。続いて、日本活動写真(日活)、松
竹キネマの映画会社が、足し、その、当、時、か
ら、フランスの映画監督は、映画会社、か、ら、の、支、
配を逃れる傾向を示した。製作機構は、他、国、を、リ、
感、覚、に、関、し、た、と、一、般、に、言、わ、れ、る、の、は、こ、の、監、
ド、し、て、き、た、と、一、般、に、言、わ、れ、る、の、は、こ、の、監、
の、気、質、に、負、う、と、こ、ろ、が、大、き、い。、日、本、大、会、社、制、度、
カ、と、異、な、く、、独、立、プ、ロ、ダ、ク、シ、ョ、ン、制、度、で、あ、る、こ、
では、特、徴、と、し、て、最、も、適、し、た、個、人、主、義、的、な、製、作、方、法、
と、が、監督、か、ら、で、あ、る。、そ、れ、は、確、か、に、フ、ラ、ン、ス、人、
ス、の、監督、か、ら、で、あ、る。、そ、れ、は、確、か、に、フ、ラ、ン、ス、人、
の、気、質、に、合、致、す、る、も、の、で、あ、る。、そ、の、上、フ、ラ、
ン、ス、で、は、映、画、を、芸、術、化、す、る、運、動、が、昔、か、ら、あ、り、
現、在、で、も、フ、ラ、ン、ス、映、画、の、製、作、機、構、や、映、画、の、感、
独、創、的、な、仕、事、や、実、験、的、な、試、み、が、随、所、の、感、覚、に、つ、
い、て、、日、本、の、大、会、社、制、度、な、ど、は、日、本、社、会、の、基、
い、日、本、の、大、会、社、制、度、な、ど、は、日、本、社、会、の、基、
的、な、構、造、と、し、て、、映、画、の、世、界、に、と、以、前、か、ら、日、
当、然、で、あ、る。、つ、ま、り、、日、活、松、竹、東、宝、東、映、
本、会、社、と、小、数、の、独、立、プ、ロ、ダ、ク、シ、ョ、ン、と、い、か、
て、い、る。、こ、の、よ、う、な、製、作、機、構、の、違、い、か、

画の内容にどんな影響を与えるであろうか、あるいは、映画の発展はどの様になるのであろうか。現今では、日本においても、フランスにいても、映画はマスコミニューテーションにもきわめて重要な役割を担っている。その役割は、その国の人々に対してだけでなく、世界にその国の特徴、文化、習慣などを紹介する方その国の特徴、文化、習慣などを紹介する方市場はその独特の制度のためほとんど国内に限定されておき、しかも、徐々にアメリカとは同じく商業主義に傾倒しつつある。娯楽または芸術はその形をとると、その美的な価値、内容の真実はその様な変化を引き起こすであろうか。

映画は芸術であるか、それとも娯楽であるか。

日本人50人を対象にして映画に関するアンケート調査を行った。その中の第一の質問は「映画から何が連想されますか。」という問いで、この質問のねらいは、最初に日本人の映画に対する感覚をとらえることであった。年齢に差はなく、「娯楽」、「映画館」、「夢」という回答が多かった。そのほか、「現実逃避」、「昔の名作の映画」、映像の美しさ、スケールの大きさ、「自分をよくするもの」などの詩的なものや、「夏休み、お正月」、「休日」、「映画の日」と言ったような具体的な回答もあった。第二の質問は「映画はあなたにとって、芸術ですか、それとも娯楽ですか。」である。80%の人から「娯楽です。」という返事が返ってきた。それは大変驚いたことで、自分の期待に反しているデーターであった。多分、フランスに人の同じ質問をしたら、50%ずつに

(4)

なるか、「芸術」と答える人の方が多いであ
らう。加えて、もっと期待を裏切ったのは、
つぎの質問の「どの国の映画が好きですか。」
という問いに、ほとんど満場一致で「アメリカ
」という答が返ってきたと言ふことである。
残念なこと、邦画を選んだ人は二人しかいな
なかつた。フランスの人にとつても残酷な結
果として、一人だけした。ただ、国を無視して、
でくれなかつた。考えを考へる人が6人もい
の価値観だけをとつた。その結果、七月に「プ
もまたフランスとプロミネール」といふ結
あ雑誌がフランス人にアンケートをとつて、同
雑誌「どの国の映画が好きですか。」と質問
した。その結果は、フランス映画49パーセ
ト、アメリカ映画17パーセント、(日本映画は
22パーセント)であつた。自分のアノケート
誌の結果を考へると、自明なことは、日本と
ランスの映画の違いはどの様にして發生した
であらうか。誕生から日本でもフランスでも常
映画の誕生かして親しまれてきた。しかし、
大フランスの場合には、より、1908年以來、
フランス性を追究するを採求してきた。日本
娯楽映画の芸術運動が1918年に起つた。し
初の芸術化運動が数多く設立された。しか
当時には経済的、社会的に不安な状況で、日
松竹に代表される大画面を作映しては、活
な状態で大衆の中心に浸透しては、安定
す大衆の中心に浸透しては、安定
独立プロダクション

成の努力をしていた。例えば、1926年の衣笠貞之助の「狂った一頁」は川端康成が書いたため前衛的な努力と認められ、新感覚派映画運動の中心として、後に、本格化的なトーンになって、日本映画の内容は一段と豊かになり、文芸映画も前衛的な映画運動が盛んとなり、映画に對する新しい試みも数多く行われる様になった。徐々に文学や演劇の支配を脱して、「純粹映画」cinema purを實現し、それによつて映画固有の美学を構築しようとするものでもあった。その前衛的な映画運動はダダイスマやシュルレアリスムの前衛芸術運動から強い影響を受けたのである。その段階までは日本とフランスの映画の発展過程はほぼ同一の経過を辿るが、第二次世界大戦に入ってからは大戦中の企業統制によつて、映画会社も松竹、東宝、日活をはじめとする数社を合併し、大映などが創立される。また映画法が施行され、映画制作数は減少する。フランスでは、ナチスの占領下で、映画は乏しくなつていったが、非占領地区の南フランスでいくつかの優れた作品が生み出された。その困難な時期を克服するため、戦争が終わつた直後には、国立映画庁の設置や映画助成金制度の制定など、国家による保護育成策が推進された。また、パリ大学などを中心に「映画学」(filmologie)という新しい学問が起こつた。もちろん映画を対象とする学問である。それでも戦後映画の復興は進みなく、多くの作品は自由な発想を欠き、50年

代末まで停滞していった。逆に、戦後の日本映画の復興は、長く困難な時代を経たにも関わらず、わずかの5年ほどで戦前の産業規模に立ち直った。その証拠になるものとして、1951年、国際映画祭（ベネチア）で日本映画の「羅生門」が優れた作品があらわされた。その後の十年間ほど、ベネチア、カンヌ、ベルリンなどの国際映画祭を始め、アメリカのアカデミー賞までの映画は松竹、東宝、大映、東映や53年に再開した日活の5つの映画会社による体制で、大手5社による体制が確立した。既に、各社がそれぞれに得意とする娯楽映画にジャンルを開拓し、スター・システムを大切にし、企業として安定しながら、芸術的な映画制作と冒険も可能であった。しかし、1958年を過ぎると、日本映画界は次第に困難な状況を迎え、逆に、フランス映画は新鮮な活力を示していった。それは「ヌーベル・バーグ」nouvelle vague（新しい波）の刺激と呼ばれている運動であった。その中心となったのは、映画雑誌「カイエ・デュ・シネマ」Cahier du cinemaの批評家と若い監督であった。そのヌーベル・バーグは確固たる映画観のもとに、既成の映画作法を破るという映画の革新を目指していた。J. L. ゴダール、F. トリュフォー、C. シャブロールなどの監督は映画界のみならず、社会的にも大きな反響をよんだ。その影響は日本にも及んだ。それは1960年の松竹ヌーベル・バーグで、大島渚、今村昌平、山田洋次などの若手の監督が意欲的な試みを行って、日本映画の新しい分

の かも 知れ ない。日 本 語 の 辞 書 に よ る と 「 芸 術 」 と は、 「 (a) 技 芸 と 学 術。 (b) 美 を 表 現 す る 創 作 活 動。 絵 画、 彫 刻、 演 劇、 舞 踊 な ど。 」 と あ る。 こ の 言 葉 は、 1883年 に 中 江 兆 民 が 西 洋 語 の 「 art」 に 対 す る 訳 語 と し て 用 い て お り、 1897年 以 後 「 美 術 」 と の 区 別 が 定 着 し た と さ れ る。 一 方 で、 西 洋 語 の 「 art」 は 芸 術 一 般 を さ す と と も に、 造 形 美 術 の 意 味 を も 含 む。 こ の 「 art」 は、 ラ テ ン 語 の 「 ars」、 さ ら に ギ リ シ ャ 語 の 「 techne」 に 由 来 し て お り、 こ れ ら の 言 葉 が 学 問 と 技 術 の 二 つ の 意 味 を 内 包 し て い る こ と は、 む し ろ 漢 語 の 「 藝 術 」 と の 近 似 性 を 示 す。 し た が っ て、 日 本 語 の 「 芸 術 」 と フ ラ ン ス 語 の 「 art」 は 完 全 に 同 じ 意 味 で は な い。 「 芸 術 」 の 意 義 は 「 art」 よ り も 狭 く 限 定 さ れ て い る。 現 実 に、 日 仏 辞 典 を 引 く と 「 芸 術 」 の 欄 に は 「 art」 と し か 書 か れ て い な い の に 対 し、 仏 日 辞 典 の 「 art」 の 欄 に は 「 ① 技 術、 術 ② (a) (熟 練 を 経 た) 巧 妙 な 技 術、 技 巧、 秘 術 (b) や り 口 の 巧 妙 さ、 狡 猾 (c) 作 為、 わ ざ と ら し さ 」 な ど、 多 種 類 の 意 義 が 日 本 語 で 表 さ れ て い る。 た と え ば、 フ ラ ン ス で よ く 使 わ れ る 表 現 "art culinaire" を 「 料 理 芸 術 」 な ど と 訳 し た な ら ば、 全 く 意 味 を 失 っ て し ま う で あ ろ う。 し た が っ て、 前 述 の 日 本 人 に 対 す る ア ン ケ ー ト に つ い て も、 80% の 人 が 「 映 画 は 『 娛 楽 』 で あ る。 」 と 答 え て は い る が、 「 娛 楽 」 と 「 芸 術 」 の 定 義 が 日 本 語 と フ ラ ン ス 語 で 異 な る 以 上、 単 純 に 比 較 す る こ と は で き な い の で あ る。

カ ン ヌ 映 画 祭

日 本 は、 フ ラ ン ス 映 画 を 年 間 60本 前 後 輸 入 し て い る の 対 し、 フ ラ ン ス へ の 輸 出 は 2 ～ 3

本程度しか行っていない。現在、フランスに
 おいて上映される外国映画のほとんどは、日
 本と同じように、アメリカ映画である。した
 がって、フランスでは日本映画に触れる機
 会がきわめて乏しいのが現実である。しか
 し、今年に限っては、多くのフランス人
 たちが日本映画を観賞することができた。
 カンヌ映画祭において、である。

今年の五月にフランスのコートダジュール
 で、第43回カンヌ映画祭が行われた。palme
 D'or(最優秀賞)に輝いた作品はDavid
 Lynch監督の「wild at heart」というア
 メリカ映画であった。1989年もアメリ
 カの映画がpalme D'orを受賞している。
 最近では、アメリカの映画が一般に数
 多く上映されているが、日本やフランス
 の作品は、数は少ないながらも高く評
 価されている。特にフランスでは、多
 くの人が日本の映画を楽しみにしてい
 る。43年の歴史を持つカンヌ映画祭は
 毎年ベニスの二つの映画祭の間に行
 われ、映画界において最も重要な催し
 となっている。そのカンヌでは監督、
 俳優、プロデューサー、等々のスタッ
 フがジャーナリスト、評論家、写真
 家、等のマス・コミの人々に混じり、
 皆で一緒に映画を祝う。有名なスター
 を見るために、多くのファン達も集
 い、その陽気な雰囲気の中で、映
 画は十日間、カンヌの街の中心とな
 る。今年も日本映画から二つの作品
 が選ばれた。その一つは黒澤明監督
 の「夢」であり、もう一つは小栗康
 平監督の「死の刺」と言う映画であ
 った。黒澤明の「夢」は映画祭のオ
 プニングに上映される特別招待映画
 として審査の対象ではなかった。黒
 澤明はカンヌの常連で、今回が3
 回目のカンヌであった。1956年に
 初めて、「生

おわりに

今日の日は仏関係を、映画と、いう観点に立っ
て考える第一に、指輸入され、映画とい、量のの不均
がまざるフランクに輸出さされる。毎年、日本の輸
されフランスに輸出さされる。これは日本映画は、日
フランスの消費極性人の日カンフ私さ、この文化へ興
社のフランスに今年多くいる。フランスは、祭で感多
現実「夢」与え、上映さ、祭で感多、は、感多、は、感
価値フランスで上、映さ、祭で感多、は、感多、は、感

一方、日本に、おけるフランス映画のアメリカにも機
方に、不満が、第一位の1に少ないケの「フランス
輸入はあるが、第4位に上った。どの国も、フランス
50本一般に、遙かたのフランス、人々、互いの国に
広く、私、行「ど、フランス、人々、互いの国に、興
比較、私の、行「ど、フランス、人々、互いの国に、興
は、私、行「ど、フランス、人々、互いの国に、興
いう問、い、に、多、か、か、わ、ら、ず、あ、ま、り、活、発、的、に、は、世、界、で、二、つ、つ、E、C、も、国
圧倒的に多、か、か、わ、ら、ず、あ、ま、り、活、発、的、に、は、世、界、で、二、つ、つ、E、C、も、国
極め、乏、か、か、わ、ら、ず、あ、ま、り、活、発、的、に、は、世、界、で、二、つ、つ、E、C、も、国
て、い、る、に、多、か、か、わ、ら、ず、あ、ま、り、活、発、的、に、は、世、界、で、二、つ、つ、E、C、も、国
的、文、化、的、一、方、で、政、治、的、取、り、払、い、お、い、て、ま、で、日、本、の、国
え、な、い、現、実、に、一、ヨ、ロ、ッ、パ、に、お、い、て、ま、で、日、本、の、国
的、規、模、で、現、実、に、一、ヨ、ロ、ッ、パ、に、お、い、て、ま、で、日、本、の、国
の、ド、イ、ツ、が、統、一、し、ま、た、1、9、9、2、年、来、東、の、果、て、の、国
が、統、一、し、ま、た、1、9、9、2、年、来、東、の、果、て、の、国

参 考 文 献

飯 島 正 著 「 日 本 映 画 史 」 1 9 5 5 , 白 水 社 .

佐 藤 忠 男 著 「 現 代 日 本 映 画 」 1 9 7 4 , 評 論 社 .

キ ネ マ 旬 報 別 冊 平 成 2 年 4 月 1 0 日 発 行 .
キ ネ マ 旬 報 社 .

R . B o s s i n o t " E n c y c l o p e d i e d u C i n e m a "
E d B O R D A S , 1 9 8 6 .

G e r a r d B e t t o n " H i s t o i r e d u C i n e m a "
P U F , Q u e s a i s - j e ? 1 9 8 6 . 2 ° e d .